上野殿御返事　　弘安二年四月二〇日　　五十八歳

抑(そもそも)日蓮種々の大難の中には、竜(たつ)の口(くち)の頸(くび)の座と東条(とうじょう)の難にはすぎず。其の故は諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり。或はのり(罵)、せめ(責)、或は処をおわれ、無実を云ひつけられ、或は面(おもて)をうた(打)れしなどは物のかずならず。されば色心の二法よりをこりてそし(誹)られたる者は、日本国の中には日蓮一人なり。ただし、ありとも法華経の故にはあらじ。さてもさてもわすれざる事は、せうぼう(少輔房)が法華経の第五の巻を取りて日蓮がつら(面)をうちし事は、三毒よりをこる処のちゃうちゃく(打擲)なり。

天竺(てんじく)に嫉妬(しっと)の女人あり。男をにくむ故に、家内(かない)の物をことごとく打ちやぶり、其の上にあまりの腹立(はらだち)にや、すがた(姿)けし(気)き(色)かわり、眼は日月の光のごとくかがやき、くちは炎をはくがごとし。すがたは青鬼・赤鬼のごとくにて、年来(としごろ)男のよみ奉る法華経の第五の巻をとり、両の足にてさむ(散)ざむ(散)にふみける。其の後命つきて地獄にを(堕)つ。両の足ばかり地獄にい(入)らず。獄卒鉄杖をもってうてどもいらず。是は法華経をふみし逆縁の功徳による。今日蓮をにくむ故に、せうぼうが第五の巻を取りて予がをもて(面)をうつ、是も逆縁となるべきか。彼は天竺此は日本、かれは女人これはをとこ(男)、かれは両のあし(足)これは両の手、彼は嫉妬の故此は法華経の御故なり。されども法華経の第五の巻はを(同)なじきなり。彼の女人のあし地獄に入らざらんに、此の両の手無間(むけん)に入るべきや。ただし彼は男をにくみて法華経をばにくまず。此は法華経と日蓮とをにく(憎)むなれば一身無間に入るべし。経に云はく「其の人命終して阿鼻獄に入らん」云云。手ばかり無間に入るまじとは見へず、不便(ふびん)なり不便なり。ついには日蓮にあひて仏果をうべきか。不軽菩薩の上慢の四衆のごとし。

夫(それ)第五の巻は一経第一の肝心なり。竜女が即身成仏あ(明)きらかなり。提婆はこころの成仏をあらはし、竜女は身の成仏をあらはす。一代に分絶(ぶんた)へたる法門なり。さてこそ伝教大師は法華経の一切経に超過して勝れたる事を十あつめ給ひたる中に、即身成仏化導勝とは此の事なり。此の法門は天台宗の最要にして即身成仏義と申して文句の義科なり。真言・天台の両宗の相論なり。竜女が成仏も法華経の功力なり。文殊師利(もんじゅしり)菩薩は「唯常宣説妙法華経」とこそかたらせ給へ。唯常の二字は八字の中の肝要なり。菩提心論(ぼだいしんろん)の「唯真言法中」の唯の字と、今の唯の字といづれを本とすべきや。彼の唯の字はを(恐)そらくはあやまりなり。無量義経に云はく「四十余年未だ真実を顕はさず」と。法華経に云はく

「世尊の法久しくして後要ず当に真実を説きたまふべし」と。多宝仏は「皆是真実なり」とて、法華経にかぎりて即身成仏ありとさだめ給へり。爾前経にいかやうに成仏ありともとけ、権宗の人々無量にいひくるふとも、ただほうろく千につち一つなるべし。「法華折伏破権門理」とはこれなり。尤もいみじく秘奥なる法門なり。又天台の学者、慈覚よりこのかた玄・文・止の三大部の文をとかくれうけんし義理をかまうとも、去年のこよみ昨日の食のごとし。けうの用にならず。末法の始めの五百年に、法華経の題目をはなれて成仏ありといふ人は、仏説なりとも用ゆべからず。何に況んや人師の義をや。爰に日蓮思ふやう、提婆品を案ずるに提婆は釈迦如来の昔の師なり。昔の師は今の弟子なり。今の弟子はむかしの師なり。古今能所不二にして法華の深意をあらはす。されば悪逆の達多には慈悲の釈迦如来、師となり、愚癡の竜女には智慧の文殊、師となり、文殊・釈迦如来にも日蓮をとり奉るべからざるか。日本国の男は提婆がごとく、女は竜女にあひにたり。逆順ともに成仏を期すべきなり。是提婆品の意なり。

次に勧持品に八十万億那由他の菩薩の異口同音の二十行の偈は日蓮一人よめり。誰か出でて日本国・唐土・天竺三国にして、仏の滅後によみたる人やある。又我よみたりとなのるべき人なし。又あるべしとも覚へず。「及加刀杖」の刀杖の二字の中に、もし杖の字にあう人はあるべし。刀の字にあひたる人をきかず。不軽菩薩は「杖木瓦石」と見へたれば杖の字にあひぬ、刀の難はきかず。天台・妙楽・伝教等は「刀杖不加」と見へたれば是又かけたり。日蓮は刀杖の二字ともにあひぬ。剰へ刀の難は前に申すがごとく東条の松原と竜の口となり。一度もあう人なきなり。日蓮は二度あひぬ。杖の難には、すでにせうばうにつらをうたれしかども、第五の巻をもてうつ。うつ杖も第五の巻、うたるべしと云ふ経文も五の巻、不思議なる未来記の経文なり。さればせうばうに、日蓮数十人の中にしてうたれし時の心中には、法華経の故とはをもへども、いまだ凡夫なればうたてかりける間、つえをもうばひ、ちからあるならば、ふみをりすつべきことぞかし。然れどもつえは法華経の五の巻にてまします。

いまをもひいでたる事あり。子を思ふ故にや、をやつきの木の弓をもて、学文せざりし子にをしへたり。然る間此の子うたてかりしは父、にくかりしはつきの木の弓。されども終には修学増進して自身得脱をきわめ、又人を利益する身となり、立ち還って見れば、つきの木をもて我をうちし故なり。此の子そとばに此の木をつくり、父の供養のためにたて、てむけりと見へたり。日蓮も又かくの如くあるべきか。日蓮仏果をえむに争でかせうばうが恩をすつべきや。何に況んや法華経の御恩の杖をや。かくの如く思ひつ

づけ候へば感涙を(押)さへがたし。

又涌出品は日蓮がためにはす(少)こしよしみある品なり。其の故は上行菩薩等の末法に出現して、南無妙法蓮華経の五字を弘むべしと見へたり。しかるに先づ日蓮一人出来す。六万恒沙の菩薩よりさだめて忠賞をか(蒙)ほるべしと思へばたのもしき事なり。とにかくに法華経に身をまかせ信ぜさせ給へ。殿一人にかぎるべからず。信心をすすめ給ひて、過去の父母等をす(救)くわせ給へ。日蓮生まれし時よりいまに一日片時もこころやすき事はなし。此の法華経の題目を弘めんと思ふばかりなり。

相かまへて相かまへて、自他の生死はしらねども、御臨終のきざみ、生死の中間に、日蓮かならずむ(迎)かいにまいり候べし。三世の諸仏の成道は、ね(子)う(丑)しの(終)をはりと(寅)らのきざ(刻)みの成道なり。仏法の住処は鬼門の方に三国ともにたつなり。此等は相承の法門なるべし。委しくは又々申すべく候。恐々謹言。

卯月二十日　　日　蓮　花　押

上野殿御返事

かつ(飢)へて食をねがひ、渇(かつ)して水をしたうがごとく、恋て人を見たきがごとく、病にくすりをたのむがごとく、みめかた(形容)ちよき人、べに(紅)しろいものをつくるがごとく、法華経には信心をいたさせ給へ。さなくしては後悔あるべし云云。